



第2次幕長戦争下における騒擾認識 : 兵庫津を事例に

澤井, 廣次

(Citation)

海港都市研究, 7:23-35

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003837>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003837>



第2次幕長戦争下における騒擾認識

——兵庫津を事例に——

澤井 廣次

(SAWAI Hirotsugu)

はじめに

日本史研究の中で、近世近代移行期については様々な視点から多くの研究が積み重ねられてきた。そのなかで、民衆運動史研究も幕末維新时期¹の民衆運動の分析を通して大きな役割を果たしてきた [遠山 2000] [佐々木 1979]。ここでは、多くの研究者によって理論的・実証的な成果を挙げてきたわけであるが、民衆運動、特に都市騒擾が同時代的にどのように認識されたのかという点に関する研究は十分になされておらず多くの課題を残している。そのような視点からの研究は、天明期 (1781～1788) の江戸打ちこわしを題材に諸階層の認識を分析した岩田浩太郎を挙げる程度であろう。幕府・武士層は基本的に暴徒観・愚民観を前提として騒擾勢を「狼藉者」・「愚成もの」などと認識し、時に騒擾の発生を幕府・藩の失政による天遣 (天罰) と捉え、政権担当者が失脚することすらあったことを岩田が明らかにしている [岩田 2004]。

一方、近代史研究の中で宮地正人は、明治初年に新政府が反新政府勢力と「都市部、とくに京・大坂の民衆との連合」を憂慮しはじめる、と述べている [宮地 1999: 41]。ここでは、近世中期とは明らかに異なる認識が存在している。ただ、なぜこのような認識が明治初年に登場するかを説明することは現時点では難しいであろう。それは、幕末維新时期における反体制勢力 (反幕にしろ、反新政府にしろ) と都市民との関係性が未だ十分解明されていないからである²。しかし、幕末期の中で幕府・武士層が騒擾勢をどのように認

1 幕末維新时期や近世近代移行期といっても、研究者によってその範囲は異なる。大まかに2つの考え方があり。1つは、開港から明治憲法体制の成立まで (1850～1880年代) をひとくくりにするものである。この考え方は開港後からの変化を重視している。しかし近年は、対外関係・内政状況の変化を重視して、18世紀後半以降から19世紀までをひとくくりにしようとする研究が増えている。[久留島・奥村 2005] 参照。

2 畿内では、京坂地域で展開した「残念さん」信仰における長州藩尊王攘夷派の民心収攬策を分析した井上勝生を挙げる程度であろう [井上 1994]。

識したかという問題を解くことで、上記の宮地が述べた認識の前提が浮かび上がってくるのではないかと考える。

そこで本稿では、慶応期（1865～68）の都市騒擾に対する認識（以下、騒擾認識）について分析を試みてみたい。具体的には、第2次幕長戦争直前の慶応2年（1866）5月8日に発生した兵庫津の騒擾を事例に幕末期の幕府・武士層における騒擾認識について検討する。兵庫津の騒擾は、情報が各地に伝達する中で様々な憶測が飛んでおり、騒擾認識を分析する格好の事例であると考えられる。なお、この兵庫津の騒擾は慶応2年に畿内で発生した一連の騒擾³の一つとしてよく知られているが、兵庫津の騒擾に関する研究は決して多くない〔島田 1953-1954〕〔兵庫県史編集専門委員会 1980〕。従って、本稿は慶応2年の兵庫津の騒擾の基礎的な実証研究としての意義も有する。そのため、騒擾の経過についても詳述する。

なお、本稿で言う第2次幕長戦争下とは、時期的には慶応元年（1865）の幕府軍上坂から慶応3年（1867）1月の終戦まで、空間的には戦争の舞台となった、または戦時体制が敷かれた地域を指すものとする。

1 慶応2年兵庫津の騒擾の概要

1 幕末期の社会状況

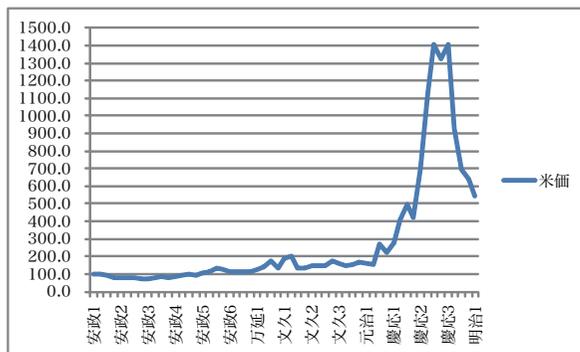


図1 大阪米価相場表 ※米価は、肥後米1石当たりの匁高(銀)

※三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』（日本学術振興会、1953年）より作成

17世紀初頭から19世紀半ばにかけて続いた江戸時代は、江戸幕府の成立期と解体期を除いて、火災や一揆鎮圧への対応以外に武士集団が軍事行動を取らなかったという点において平和な時代であった。しかし19世紀に入ると対外的な緊張の高まりや内政の混乱などが起こり、政治が不安定になった。

特に安政6年（1859）に横浜が開港して以降、社会は大きく変容した。それを象徴する事柄は、一つには、米価に代表さ

3 この研究に関しては、酒井一の一連の研究成果があるが、兵庫津についてはあまり触れられていない〔酒井 1974〕〔酒井 1978〕。

れる諸物価の高騰である。米価については図1に見える通り、横浜開港以後は常時肥後米1石当たりの米価が100匁を越え、慶応2、3年（1866、1867）には1,400匁を越えるほどの米価高騰が起こっていた様子が分かる⁴。もちろん米価高騰の要因は開港によるもののみではなく、万延元年（1860）の貨幣改鋳や慶応元年（1865）の凶作なども大きな影響を与えた。しかし、特筆すべきことは、やはり二度にわたる幕長戦争による影響であろう。第1次幕長戦争が起こる元治元年（1864）以降、米価は上昇を続けており、特に第2次幕長戦争が起こる慶応2年には、開港前の約10倍ともなるのである（図1参照）。これは、長州藩による下関・赤間関での船留めの影響を受けて、畿内の主要米である西国米・北国米の供給量が減少したためであり〔宮崎 2009〕、また約30万人とも言われる幕府軍が約1年間も大坂及び兵庫津をはじめとする近辺地域に滞留したことに伴う米価需要の増大が背景となっていた。

もう一つの象徴的な事柄は、幕府と戦争を起こす藩（長州藩）の登場であり、また長州藩をはじめとする各藩士が脱藩浪士となり、各地に滞留したことである。

幕末期、特に將軍家茂が上洛する文久期以降において、長州藩に代表される反幕勢力が攘夷決行・反外国交易をスローガンに外国との交易に携わる商人や幕吏に対して天誅事件を決行し、また「天誅」を行う旨の張紙を貼るなどの行為が畿内で横行していた。天誅事件や張紙による幕府批判は、元治元年7月の禁門の変後に後退したが、脱藩浪士たちが畿内各地へ流入するという動向は止まらなかった。そのため、幕府は彼らのような反幕勢力とのつながりがあると思われる者たちを「浪士」「浪人体」「浮浪之者」「浮浪人」などの名称で呼んで警戒を強めていた（以下「浪士」で呼称を統一する）。なお、「浪士」問題は第II章で改めて論じる。

これらの社会状況は、本稿で取り上げる兵庫津においても例外ではなかった。兵庫津における具体的な影響については後述するが、そのような状況下で、しかも第2次幕長戦争が起こる直前の慶応2年5月8日に兵庫津で騒擾が発生したのである。

2 騒擾の発生・展開と諸階層の動向

騒擾の始まりについては、『兵庫県史史料編 幕末維新1』のどの史料の記述もさほど

4 図1は大坂の米価変動を示したものだが、兵庫津の米相場も大坂の相場を一つの基準として立てられているため、微細な差異は当然存在するが、大まかな傾向を示すには十分であると考えられる。実際に大坂米相場の動向については、三田町（現兵庫県三田市）の鍵屋重兵衛家のもとに1日ごとに伝えられており〔桑田 2005〕、大坂の周辺地域にとって重要な情報であったことが分かる。

誤差はなく、夕方より湊川に結集し、五つ時頃より兵庫津中へ流入したと考えられる。結集の契機として、『兵庫県史 第五巻』は、三田町人鍵屋重兵衛の日記『諸事風聞日記』を使用して、8日朝に湊川堤において浪人の人斬りがあり、その見物人が多数湊川に寄せていたことに注目している。しかし、朝から騒擾が発生する夕方まで大勢が湊川に居続けたとは考えにくい。仮にそのような状況があった場合、兵庫勤番所及び当時兵庫津を警備していた丸岡藩・岡藩などが強く警戒していたはずである。しかし、丸岡藩の届書では「昨八日夜五時頃湊川表江多人数屯集」〔「雑書集」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：323-324〕とあるのみであり、そうした様子は窺えない。従って、仮に湊川堤における浪人の人斬りが事実であったとしても、騒擾はそれとは直接関係なく、夕方から始まったと考えられる。

竹槍や鳶口・棒などを携えて湊川に結集した騒擾勢は、五つ時頃から兵庫津中に流入した。まず湊町に流入し、近辺の米屋などを打ちこわした。その後も木場町・鍛冶屋町などで打ちこわしを行ったのち、騒擾勢は数手に分かれて打ちこわしを行った〔「諸事日賀恵」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：318-320〕〔「知新雑纂」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：324〕。騒擾勢は多くの店で「矢庭ニ表格子上ケ、店打碎多人数込入、店戸棚・建具・道具類打碎」〔「島津家国事鞅掌史料」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：322-323〕といった破壊行為を行っていた。打ちこわしに際して、騒擾勢が米穀などには手を付けず、道具や帳簿などだけを打ちこわすという行動は不徳な豪商への社会制裁行為であるとして近年の民衆運動史研究の中で注目されており、ここでも同様のものが見いだせるように思われる〔岩田 2004〕。岩田の都市騒擾研究に代表されるように、近年の民衆運動史研究では、このような騒擾勢の規律性・秩序性が強調され、騒擾はある一定の規律のもとで展開すると考えられている。騒擾勢に規律性・秩序性が存在すること自体は否定しないが、都市騒擾の場合、そのようなある一定の規律のもとで騒擾がすべて展開したとは考えにくい。例えば豪商北風荘右衛門家では、何心なく参加した者たちが「と越をはずし内へ入、家たヲスなどハせず、道具も別々つぶさず、手ニ当る物少々つぶす」〔『諸事風聞日記』：23〕といった様子であったと記されているし、諸問屋石屋治兵衛家では、店の前で飯の準備をして騒擾勢を待ち受けていたところ、「一手二手は都合能引取候へ共、三度目ニ大勢参り酒飯十分くらい居候而相進め候而も飯酒ニ眼もふれず」〔「諸事日賀恵」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：318-320〕打ちこわされたと記している。このように人・集団によって温度差

が生じていたと考えられる。社会制裁行為としての打ちこわしを目的とする層⁵、食料にありつくことが目的の層、見物ついでに参加した層などいくつかの階層が抽出できる。当然ながらそのような区分が明確に存在したわけではないが、様々な人々が流動的に参加したことによって騒擾は拡大していったものと思われる。従って、騒擾勢数の算出は困難を極めるが、史料から推定するに、2,000人程度ではなかったかと考えられる⁶。

この騒擾に対して、打ちこわしの対象者となりうる豪商層・町人層は何もしなかったわけではない。騒擾発生以前から個人・仲間として施行を行っていた。例えば北風荘右衛門家では「三月廿七八日より毎三斗ツ、毎日粥をたき」[『諸事風聞日記』:20] 施行をしていし、また米穀屋中でも四月中旬以降に集会を行い、「助成米・安売米致度由、御名主様江申上、町々相調候而、木場之町西側之裏於酒造場始」[『諸事日賀恵』『兵庫県史史料編幕末維新1』:318-320] と記されるように施行をしていた。彼らがこのような救恤活動を行ったのは、石屋が出入の者の仲介によって打ちこわしをまぬがれた際に、「世間之外聞面北次第も目出度」[『諸事日賀恵』『兵庫県史史料編幕末維新1』:318-320] と述べている通り、被害を受けることが自家の評判に響くと考えていたからであろう。

では最後に、この騒擾を鎮圧した幕府（兵庫勤番所）、諸藩の動向を見ていく。

騒擾の発生を受けて、丸岡藩が鎮圧に当たった。当時兵庫津を警備していた藩は丸岡藩の他に小浜藩・岡藩・福井藩が存在した。各藩の出兵が兵庫勤番所よりの要請であった可能性及び各藩の連携については、島田清論文に詳しい[島田 1953-1954]。ここでは実際に鎮圧を行った丸岡藩の動向を中心に見ていく。

丸岡藩の届書[『雑書集』『兵庫県史史料編幕末維新1』:323-324]によると、湊川に「何者共不相知」者たちが竹槍や棒などを携え屯集していた。その後騒擾勢が湊口惣門に押し寄せたので、柳原口惣門・本町筋に兵を配置した⁷。騒擾勢が瓦礫などを打ちかけてきた

5 騒擾の前日に張り紙が存在したという記述（「七日ニ張紙ヲ致、八日ニあばれる四十人程」[『諸事風聞日記』:23]）が存在するが、仮にその記事が事実ならそのような行為を行った人々も彼らであろう。

6 『兵庫県史史料編幕末維新1』中の「島津家国家鞆掌史料」・「知新雑纂」・「雑書集（筆者注：兵庫津町人吉田屋与兵衛書状）」に騒擾勢は2,000人程度、「鈴木寛敏手記」に1万人程度、「雑書集（筆者注：丸岡藩届書）」に1,000人程度、「黒川秀波筆記」に3,000人程度と記述されている。

騒擾勢1万人程度説については、兵庫津の騒擾後の施行米受給者は約1万600人であり[[『諸事日賀恵』『兵庫県史史料編幕末維新1』]、他地域の事例から見ても施行人数と騒擾勢が同等数ということは考えにくく、かつ根拠史料が風聞史料であるため信用できない。

1,000人程度説・3,000人程度説については、これを否定する根拠は持ち合わせていないが、最も記述量が多く、かつ兵庫津町人からの情報であることが明確な史料が存在するため、ここでは騒擾勢数を2,000人程度とした。

7 両惣門の位置などについては図2を参照。

ので空砲を放ったが、退く様子はなく、騒擾勢が町家に乱妨するので鎮圧にかかった。その結果数十名を捕縛し、暁天には騒擾勢を散乱させた、とある。また別史料によると、鎮圧の中で騒擾勢が竹槍で手向かったため、丸岡藩も槍・鉄砲などで対抗し、騒擾勢 12、3 名が死亡したとあり [「雑書集」『兵庫県史史料編 幕末維新 1』:324-325]、さらに、鎮圧の過程で丸岡藩は大筒 2 挺の使用許可を勤番所に求めていることから、非常に激しい鎮圧が行われたことが分かる。

II 騒擾における社会状況の影響

1 騒擾と米価高騰

兵庫津の騒擾は、様々な目的を持った人々が参加し、打ちこわしを行い、また食料にありつくなどの行為を行うも、当時兵庫津を警備していた藩による激しい鎮圧によって 12、3 名もの騒擾勢が死亡するといった事件であった。この騒擾は当時の社会状況の影響を受けつつも、近世に起こった様々な騒擾と類似点を持っていた。

騒擾勢による打ちこわし被害を受けた家は合計 35 軒で、「何れも米渡世之者」[「雑書集」『兵庫県史史料編 幕末維新 1』:324-325] であったと記されるように、騒擾の根本には、米穀問題が存在したことは明らかである。多くの騒擾がそうであるように、この騒擾も特に第 2 次幕長戦争の影響を受けた米価高騰による都市民の生活圧迫が騒擾発生 の要因であった。豪商層・町人層による米・粥などの施行がそれを如実に物語っている。

また騒擾が発生・波及したことの一つの要因として、米屋による米穀買占め情報があった。真偽は不明であるが、北風荘右衛門出店木屋与兵衛では 8,000 石を買い込んでいるという風聞があった [「雑書集」『兵庫県史史料編 幕末維新 1』:324-325]。慶応 2 年 (1866) 4 月段階の米穀屋中の施行がおよそ 10 石強であったことを踏まえると、その額がいかに莫大なるものであるかが分かるであろう。なお、ここで重視したい点は、こうした風聞が信憑性を持つ社会背景が存在したことである。当時第 2 次幕長戦争を間近に控えて幕府軍が畿内・西国街道筋に集中しており、大量の兵糧米が必要であることは目に見えていた。このような状況下で、幕府御用を担う北風家が大量の米穀を買い込んでいるという風聞が事実かのように人々に受け入れられたとしてもさして不思議ではないであろう。騒擾発生の際に、「北へ行ケ」[『諸事風聞日記』:23] という声が上がったように、まず北風家が標的にされたことの一つにはこのような風聞が影響を与えたと推測される。

このように、第 2 次幕長戦争下という時代性を背景とした米価問題が騒擾発生・展開

の大きな要因であった。

2 幕末期「浪士」問題

前章第1節で述べた通り、当時幕府武士層による「浪士」への警戒が存在した。その点との関連が窺える2点の史料を以下で紹介する。島津家にもたらされたと思われる騒擾の報告書では、「御固メ之御人数並御番所ヨリ鎗鉄炮打掛ケ双方ヨリ打合ニ相成候ヨシ、尤一揆之掛引百姓計トハ相見ヘ不申、浪士交リ居候様子ニテ誠ニ以大混雜御座候」[「島津家国事鞅掌史料」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：323]と記されている。また宛先は不明だが、兵庫町人の吉田屋与兵衛は、書状のなかで騒擾の経過を詳述した後、「尤浪人之者一人も無之噂」[「雑書集」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：325]と述べている。

この2点の史料で注目したいことは、「浪士」の参加を疑う、否定するという差異がありつつも、「浪士」の参加の有無が問題の前提になっている点である。このような認識は、当時問題となっていた「浪士」問題が前提にあったと思われる。まずは「浪士」問題とは何かについて本節で確認したのちに、「浪士」と騒擾の関係性について次節で検討したい。

先述した通り、幕末期畿内においては、脱藩浪士への警戒を前提とした「浪士」問題が大きな課題となっていた。特に第2次幕長戦争のために、京坂地域に幕府軍が大量に滞留した慶応元年閏5月以降になると、幕府による「浪士」へのさらなる警戒及び強力な弾圧が行われていた。例えば、將軍下坂直前の慶応元年（1865）閏5月16日頃に、幕府は「防長賊徒共之内、本國を脱走致し、諸所潜伏之聞へも有之」[「續徳川實記」『大阪編年史 第二十四巻』：224]という情報を得ていた。そこで、軍事拠点として最も警戒されるべき地域であった大坂では、この情報を前提にしたと思われる御触が同月21日頃に出されており、「近頃當地江浮浪之者潜入致候」という風聞があったことから止宿者の取締を強化する、という「浪士」対策が取られた[「御触及口達慶應元年」『大阪編年史第二十四巻』：225-226]。

しかし、ここで押さえておくべきことは、幕府の念頭には脱藩浪士が想定されていると考えられるが、「浪士」はあくまで認識コードだという事実である。当時脱藩浪士に共鳴して彼らと行動を共にする百姓・町人も存在したし、また脱藩浪士といっても、彼らが武士としての身分表象をしていない可能性もありえた。例えば、大坂の事例であるが、慶応2年（1866）4月5日頃に小筒を落として大坂で捕まった乞食は、取り調べたところ長

州藩の脱藩浪士であったという⁸。この事例が事実であるかどうかは別問題としても、そのような事例は当然予想されることであった。そのため、戦争に伴う大量の人夫流入などが存在した慶応期畿内の都市において脱藩浪士を厳密に取り締まることは非常に困難なことであった。また当該期の人別帳ではきめ細やかな住民把握が困難であった点はすでに指摘されている [横山 2005]。そのため慶応期において「浪士」問題が解決されることはなかった。

そのような中で幕府に大きなインパクトを与えた事件が、慶応2年4月9日に発生した倉敷代官所焼き打ち事件⁹である。長州への攻撃を前提とした第2次幕長戦争期には、西国街道は物資輸送の重要拠点となっており、倉敷も幕府軍の前線基地として位置づけられていた。そのため、長州藩の脱兵によって引き起こされた倉敷代官所の焼き打ちは、幕府軍に大きなインパクトを与え、各地で「浪士」探索が行われるなどの対策強化へとつながっていくこととなった¹⁰。もちろん、兵庫津も例外ではない。というよりもむしろ、兵庫津が最も警戒されるべき地域の一つであった。というのは、兵庫津は瀬戸内海航路の重要港であると同時に、西国街道の宿駅としての機能を有していたため、海上・陸上においても重要な物資集散地として発展し、都市化が早くから進行していた地域であったからである【図2参照】。従って、第2次幕長戦争に際しては、兵庫津が物資・兵力などを大坂から長州へ運ぶ重要な中継地となっていた。このような点から、幕府は戦争遂行上重要拠点の一つであった兵庫津の警備を丸岡藩などに命じていたのである。

そのような中で、兵庫津及び周辺地域に「浪士」が流入したという情報が舞い込んできた。慶応2年4月24日に、灘御影浜に「浪士」が約30人上陸し、諸方へ向かったという情報を三田町人鍵屋重兵衛が入手した [『諸事風聞日記』: 21]。この情報は幕府側にも入ったと思われ、鍵屋の日記の続きに、亀山藩と田安家が「浪士」探索に来た様子を伝えている。そして、この「浪士」の一部が兵庫津にいるらしいとの情報を得たため、5月3日に兵庫津の役人へ情報が伝えられた、と鍵屋が記している。また、同年4月23日に兵庫津西長

8 正確には、「乞食跡之者」であり、乞食と断定されていたわけではないが、乞食の身なりをしていたことは間違いない [『藤岡屋日記 第13巻』: 554]。

9 第二奇兵隊員立石孫一郎（倉敷の豪商大橋平右衛門の養子）は、慶応2年4月5日夜、約130人の同志隊員らと奇兵隊陣営を脱走、備中連島に上陸。4月10日暁に倉敷代官所を突如焼打ちして代官所内の11人の男女を殺傷。4月12日夜半浅尾陣屋を焼打ちし占領。岡山藩・松山藩が鎮圧に大挙出兵したため、立石らは退散するも途中で幕府軍の攻撃を受け壊滅四散した。立石は逃走、帰隊の途中、4月26日第二奇兵隊関係者の手で殺害された。

10 倉敷代官所焼き打ち事件は、各地の警備体制にも影響を与えており、大坂では幕府が在坂軍に対して、4月21日に市中巡邏の強化を命じている [『續徳川實記』『大阪編年史 第二十四巻』: 335]。



図2 兵庫津陸海上交通

※兵庫県史編集専門委員会 1980『兵庫県史 別巻』兵庫県、所収の「文久2年(1862)兵庫津之図」より筆者加筆。

田村に「十四五人計又ハ十五六人式組」の「浪士」集団が上陸し、京坂へ向かったらしいという情報が飛び交った[「小寺玉晁雑記」『大日本維新史料稿本』:KE062-0469]。その情報は神戸村庄屋の生嶋四郎太夫から大坂谷町代官所へ、また丹波路へも流入したという情報が存在したため京都所司代の元へも届けられた。

もちろん、この警戒は兵庫津のみならず、新潟でも「浪士」警戒のための兵を配置する[「村松藩主奥田直賀上申書」『大日本維新史料稿本』:KE065-0367]など、当該期の「浪士」問題、特に長州藩脱兵による事件発生の警戒心を高めていた。

海路を使用して幕府の重要拠点の近くに上陸するという方法は、前述の倉敷代官所焼き打ち事件と同様であり、幕府側は倉敷と同様の事件への警戒を強めていたであろうことは容易に想定できる。実際に、神戸村庄屋生嶋は、4月23日に兵庫津に上陸した「浪士」と倉敷代官所焼き打ち事件に参加した者たちとの関係を気にしつつ、情報を大坂谷町代官所へ伝えている¹¹。

このように、騒擾が発生する直前において、兵庫津では「浪士」問題が非常に大きな課題となっており、幕府も対策を強化して彼らが策動を起こす前に対処しようとしていた。

11 4月24日の大坂谷町代官齋藤六蔵宛神戸村庄屋生嶋四郎太夫の注進書写によると、生嶋は「備中国乱妨之賊党共何方へ坎逃去候趣、然ル処右組之者共不相分候」[「時勢叢談」『大日本維新史料稿本』:KE062-0469]と倉敷代官所焼き打ち事件を念頭に置きつつ、「浪士」を警戒していた。

3 騒擾への「浪士」参加に対する関心

兵庫津の騒擾は米価高騰を主な要因として発生したと考えられ、その点において、他の都市騒擾と大きく変わらない。しかし、騒擾認識に着目すると、本章第2節で明らかにした通り、「浪士」参加の有無が一つの大きな問題として浮上していた。それは、特に兵庫津及び周辺地域において「浪士」が流入しているという情報が存在し、また幕府が「浪士」対策を強化している状況の中で騒擾が発生したためであったと考えられる。そのために、騒擾勢と直接対峙した丸岡藩が激しい鎮圧が行ったとも考えられるが、この点の確証はない。ただ少なくとも前述の史料にある通り、騒擾勢の具体像が掴めない幕府・武士層にとっては、騒擾への「浪士」参加の有無が大きな関心の一つであったのである。

また、兵庫津の騒擾においては、騒擾勢が鎮圧軍に立ち向かう様子は非常に暴力的な様相を示している。このことに関しては、一揆研究において、幕末期には一揆の暴力性が増大すると指摘されている〔須田 2002〕。一揆と騒擾の違い、地域の違いなども十分考慮しなければならないが、暴力という側面では先行研究の指摘が正しいとも言える。しかし、ここで注目しておきたいことは、仮にこの事例が暴力性の増大を示す事例であれ、それが「一揆之掛引百姓計トハ相見へ不申」〔「島津家国事鞅掌史料」『兵庫県史史料編 幕末維新1』：323〕とあるように、特に長州藩脱兵を念頭に置いた「浪士」参加への疑念に結びつくという点である。

このような認識は「浪士」上陸情報の影響により兵庫津の騒擾において特に強く意識されることとなったが、第2次幕長戦争下の地域全体において、同様の認識が顕在化する地盤があったと想定される。例えば、慶応2年（1866）5月22日の河内国国分村で発生した騒擾では、「八百人余御座候而、竹鎚壺本ツ、鉄砲百挺用意（中略）百姓計々々ニハ用意厳敷候、定而浪人入込ニ相成」と代官所手代が認識している〔「仲村誠一文書」『柏原市史 第5巻史料編2』：223〕。また、慶応2年8月の小倉城落城を契機とした小倉藩の打ちこわしでも、実際には長州勢の参加はなかったようであるが、「長州勢打ち交じり」¹²という報告が存在したことが知られている。

都市騒擾への「浪士」参加の有無が大きな問題としてクローズアップされる点は、第2次幕長戦争直前という政治状況、特に当該期において非常に問題視されていた「浪士」問題を背景として登場した当該期特有の騒擾認識であった。つまり、第2次幕長戦争下であり、かつ「浪士」問題が解消されない状況では、幕府・武士層にとって都市騒擾が単に

12 原史料に当たれなかったため、〔宮崎 2009〕の344頁より引用した。

都市民の困窮を背景とした運動とのみ認識できないという問題が発生した。

おわりに

ここで、本稿の内容をまとめておきたい。

慶応2年(1866)5月8日に発生した兵庫津の騒擾では、騒擾勢が竹槍などを携えて米屋や有力商人の店や居宅を打ちこわした。騒擾は、ある一定の規律のもとにあったのではなく、様々な人・集団が流動的に参加し、展開していた。一方、騒擾以前から町人層・豪商層は施行などの対応を行い、また騒擾発生後は当時兵庫津を警備していた丸岡藩が、騒擾勢12、3名が死亡するほどの激しい鎮圧を行うという対応が取られた。

丸岡藩による激しい鎮圧も影響したのかもしれないが、この騒擾の大きな特徴は、幕府・武士層の認識の上で騒擾勢の中に「浪士」が参加しているかどうかの問題となる点である。この認識の登場・拡大は、幕末期に暗躍していた「浪士」の動向を幕府・武士層が非常に警戒していたことが大きな要因であった。特に倉敷代官所焼き打ち事件と同様の事件への警戒が強まった慶応2年4月には、長州脱兵を念頭に置いた「浪士」探索が兵庫津でも行われていた。当時「浪士」の実態把握を幕府が十分に行える状況にはなく、「浪士」問題が解決しない中で兵庫津の騒擾が発生したために、騒擾への「浪士」参加の有無が大きな問題として捉えられ、警戒されたのである。この新たな認識は戦争直前という緊迫した状況及び「浪士」が実際に幕府代官所を襲うという時代の中で発生した極めて当該期特有の現象であった。

近世中期における幕府・武士層の騒擾認識は、暴徒観・悪徒観を前提としたものであり、その上で時に騒擾の発生を天遣(天罰)と捉えた。もちろん、そのような認識は幕末期においても存在したと思われる。しかし、本稿で述べた通り、慶応2年兵庫津の騒擾と「浪士」との関係性が幕府・武士層にとっては大きな問題となっていた。つまり、反幕勢力との関係性が疑わしい「浪士」が仮に騒擾に参加していたとすると、それは反幕運動に極めて近いものであるため、幕府・武士層はその点を非常に警戒していたと考えられる。このような点は従来顧みられていなかった事実であり、また幕末維新期の騒擾の変容を考えるにあたって重要な論点であろう。このような騒擾認識の登場は、騒擾を天遣(天罰)と捉える認識の変容をも迫るものであったと考えられる。

もちろん、兵庫津におけるこのような騒擾認識は第2次幕長戦争下で出てくる認識であり、ストレートに明治初年に結びつくわけではないと思われるが、本稿で明らかにした

このような認識が前提となって、はじめに述べたような明治初年の新政府の憂慮が出てくるのではないと思われる。また、新政府は明治初年の騒擾に対して近世期とは異なり激しい弾圧などを行うが、兵庫津で見られた騒擾認識がこのような様相の直接的・間接的な要因の一つとなったのではないか。

本稿では、幕府・武士層の騒擾認識を中心に言及したが、残した課題は多い。第一に、騒擾認識の慶応期以降については展望を示したに過ぎないことである。慶応2年以降の騒擾ではどのような認識がなされるのか、また地域社会の中でその影響がどのように反映されるのか、刻々と変容する政治・社会状況を踏まえた上で今後検討していきたい。第二に、地域社会構造の実態に即した騒擾の展開過程などを十分明らかに出来なかったことである。第2次幕長戦争下という特殊な状況の中で発生していることもあり、この点は重要な問題であろう。この点も課題としたい。第三に、天保7年(1836)に発生する大塩の乱との関連性である。都市騒擾と大塩の乱は少し位相が異なると筆者は考えるが、少なくとも認識レベルではどのような連続性・関連性があるかは言及すべき課題であり、今後検討していきたい。

参考文献

参考史料

- 『大日本維新史料稿本』(東京大学史料編纂所デジタルデータ)、
大阪市史中央図書館 1977 『大阪編年史 第二十四巻』大阪市立中央図書館、
柏原市史編纂委員会 1981 『柏原市史 第5巻史料編2』柏原市役所、
桑田優 2005 『諸事風聞日記—北摂三田鍵屋重兵衛(朝野庸太郎)家文書』敏馬書房、
鈴木棠三・小池章太郎 1994 『藤岡屋日記 第13巻』三一書房、
兵庫県史編集専門委員会 1998 『兵庫県史史料編 幕末維新1』兵庫県、

二次文献

- 井上勝生 1994 『幕末維新政治史の研究—日本近代国家の生成について—』塙書房、
岩田浩太郎 2004 『近世都市騒擾の研究—民衆運動史における構造と主体—』吉川弘
文館、
久留島浩・奥村弘 2005 『展望日本歴史 17巻』東京堂出版、
酒井一 1974 「慶応二年大坂周辺打毀しについて」『歴史科学大系 23 農民闘争史 下』

- 校倉書房, 241-254 (初出は1959年の『国史論集 二』).
- 酒井一 1978 「幕末期の社会変動と人民諸階層」『日本史研究』131号, 41-55.
- 佐々木潤之介 1974 『世直し』三省堂.
- 島田清 1953 「慶應二年に於ける兵庫の「コボテ」(上)」『神戸史談』205, 9-12.
- 島田清 1953 「慶應二年に於ける兵庫の「コボテ」(二)」『神戸史談』206, 11-14.
- 島田清 1954 「慶應二年に於ける兵庫の「コボテ」(三)」『神戸史談』207, 9-12.
- 島田清 1954 「慶應二年に於ける兵庫の「コボテ」(四)」『神戸史談』208, 21-25.
- 須田努 2002 『「悪党」の一九世紀——民衆運動の変質と“近代移行期”——』青木書店.
- 遠山茂樹 2000 『明治維新』岩波書店 (初出は1951年).
- 兵庫県史編集専門委員会 1980 『兵庫県史 第五巻』兵庫県.
- 宮崎克則 2009 『九州の一揆・打ちこわし』海鳥社.
- 宮地正人 1999 『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店.
- 横山百合子 2005 『明治維新と近世身分制の解体』山川出版社.

(神戸大学大学院人文学研究科)